

NETWORK

持続可能なまちづくりを実現するためには  
 ～地域資源を活用したサステナブルな取組視察 in 四国～ ..... 2  
 海陽町の歴史と自然に触れる ..... 4  
 ノスタルジックな水族館 ..... 6  
 ご意見、近況などの紹介 ..... 7  
 見・聞・食  
 八女市上陽町に「ダニエル・イノウエ・ミュージアム」がオープン ..... 8  
 近況  
 「博多津要録」 ..... 10

●変化しながらもにぎわいを保ち続ける上川端商店街

これまで当社は、川端通商店街の業種別店舗数の変遷を見てきました(※1)。現地調査により2024年9月現在の業種別店舗数を地図にプロットすると、下図となります(※2)。Google Mapのストリートビューで確認した2019年の業種別店舗数と2024年の現地調査結果を比較すると、ファッション・小物が10店減少し、飲食店が18店増加しました。

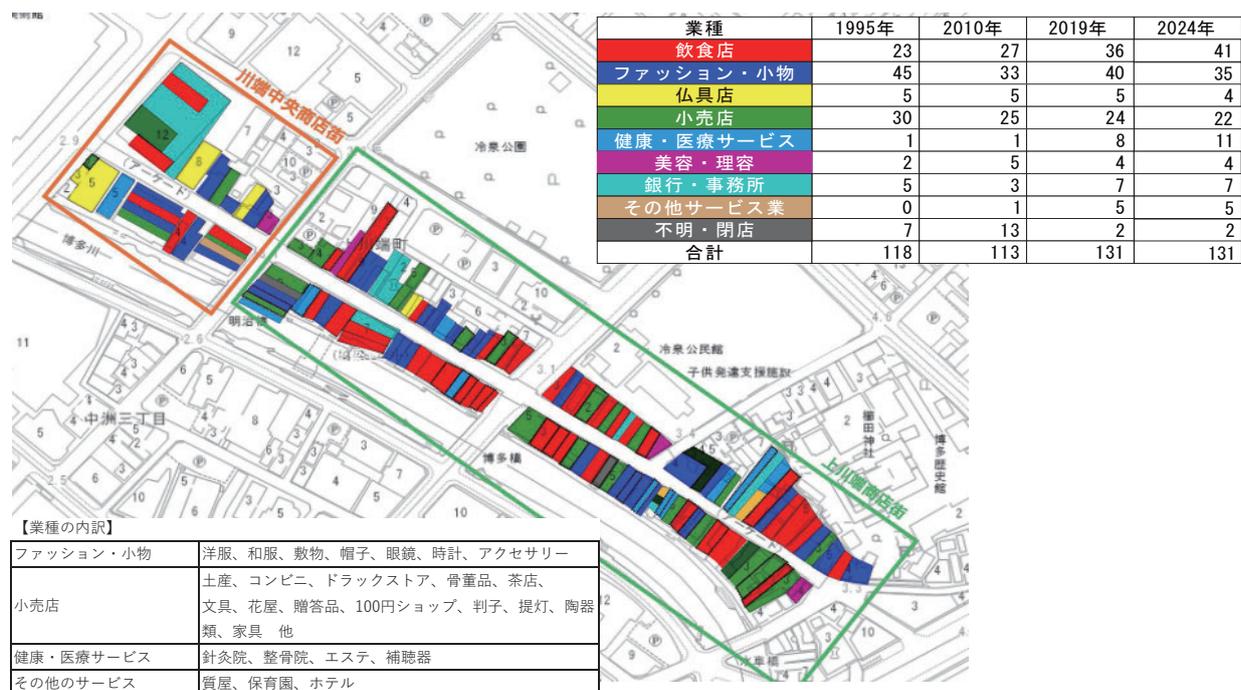
20年間という長期で業種別店舗数にどのような変化が起きているのかを詳細に見るため、上川端商店街振興組合HP(※3)に掲載されていた2001年時点の店名が記載されたマップと、2024年の現地調査結果を比較すると、婦人服や時計、眼鏡等を取り扱う店が25店減り、全国チェーンの居酒屋が9店増加しました。

2024年まで20年以上続いている店は、仏具店や帽子店、ドレスショップ、刺繍店、陶磁器店、印鑑屋といった専門店が多くを占めます。長く経営ができている理由としては、様々なニーズに対応するための幅広い種類の商品を取り揃えている、顧客がついている、店が自己所有のため賃料がかからない、などが挙げられると推測されます。

上川端商店街では、20年間で約7割の店舗が入れ替わりましたが、2024年時点の空き店舗数は2件のみであり、時代に合わせて変化しながらにぎわいを保ち続けています。

■ 2024年業種別店舗区分図(※2)

■ 川端商店街の店舗数の変遷(※1)



※1 1995年、2010年はゼンリン住宅地図、2019年はGoogleMap、2024年は現地調査により確認  
 ※2 2019年から2024年に変化した店舗を点線にて表現  
 ※3 上川端商店街振興組合事務局HP [web.archive.org/web/20010410191617if\\_/http://hakata.or.jp/map/mapa.htm](http://web.archive.org/web/20010410191617if_/http://hakata.or.jp/map/mapa.htm)(参照 2024-09-10)

## 持続可能なまちづくりを実現するためには

～地域資源を活用したサステナブルな取組視察 in 四国～

益戸 亮平

前号 (No.154 2024.5) の最後にお知らせしましたが、5月17日(金)～5月19日(日)にかけて、研修旅行で四国を訪問しました。そこで、3日間の研修旅行の報告をしたいと思います。

### ●研修旅行の目的はサステナブルな取組事例の調査

今回の研修旅行は、地域資源を活用したサステナブルな取組について調査することを目的に実施しました。

人口減少や過疎化は全国各地で見られており、地域が存続するためには、持続可能なまちづくりが重要です。そこで、先進的な事例を調査することで、今後の地域のまちづくりを考える上での参考になると考え企画しました。

今回の研修旅行は、徳島県上勝町の葉っぱビジネスやゼロ・ウェイストの取組、徳島県海陽町の自然と共生した轟神社や藍染の取組、高知県室戸市の学校跡を活用した廃校水族館の3ヵ所をメインに訪れました。本記事では、徳島県上勝町の取組をご紹介します。

#### 【研修旅行の行程】

日程	行程
5月17日(金)	上勝町視察
5月18日(土)	海陽町視察 むろと廃校水族館視察
5月19日(日)	高知市

### ●上勝町視察

徳島県上勝町は、徳島県中部の山間に位置し、人口約1,500人と四国で一番小さな町です。高齢化率も50%以上と高齢化が進行している地域ですが、彩事業(葉っぱビジネス)やゼロ・ウェイストなど特徴的な取組が継続的に行われており、全国的にも注目を浴びています。

取組を始めた経緯や現在の状況を学ぶため、合同会社パンゲア(上勝町より業務委託)が主催する上勝町視察メニューに申込み、彩事業(葉っぱビジ

ネス)とゼロ・ウェイストの取組に関する研修を受講しました。視察メニュー終了後には、アルパックの畑中さんの紹介で、上勝町のゼロ・ウェイスト推進員の藤井園苗さんから、これまでの活動や地域のコミュニティの状況などについてお話しいただきました。

### ●彩事業(葉っぱビジネス)

上勝町を一躍有名にした葉っぱビジネスは、昭和61年に始まり、30年以上継続している取組です。現在は年間2億6千万円の売上で町内の主要な産業となっています。

葉っぱビジネスは、株式会社いろどりの代表取締役社長である横石知二氏が立ち上げたことが始まりです。ビジネス立ち上げ前の上勝町は、農業・林業がともに衰退し、生産者は経済的に厳しい状況にありました。その当時町内でJA職員として働いていた横石氏は、その状況を打開するために、山間で高齢者の多い上勝町において身近に豊富にある葉っぱという地域資源を活用したビジネスに取り組みました。当時、高級料亭では、料理のつまとして使用する葉っぱを、料理人自らが山に入り、葉っぱを採集していたそうです。

横石氏は葉っぱビジネスを進める中で、花卉農家への栽培に関する相談や、葉っぱが使用されている料亭に通い、現場での商品ニーズの把握といった市場調査を行うなど地道な努力を重ねることで、商品価値を高めビジネスを軌道に乗せました。

葉っぱビジネスは、営農戦略・栽培管理を農家、受注・精算・流通を農協、市場分析・営業活動・システム運営を株式会社いろどりが担う、三位一体のビジネス形態となっています。受注は農協が行っていますが、インターネットのみでの受付となっており、PCやタブレット等の電子機器を率先して導入している点は特徴的です。高齢者の多い町ですから、導入の際には企業と連携した講座を実施するなどサポート体制もしっかりと構築されているそうです。

現在、国内の葉っぱビジネスは上勝町が6～7割

のシェアを誇っています。その他では、愛知県豊田市など全国10か所程度あるそうですが、商品単価が高くないことや手間がかかることなどから大企業の参入は難しく、農業法人など小規模での実施がほとんどと言われています。

葉っぱビジネスは、山あいの地形で身近にある葉っぱを資源として捉え最大限に活用した山間地域に適したビジネスであり、それを一から先駆的に始め継続することで、町の主力産業へと変貌を遂げています。

### ●ゼロ・ウェイスト

ゼロ・ウェイストについては、昨年度、上勝町と同じく全国有数のリサイクル率を誇る鹿児島県大崎町でリサイクルに関する業務をお手伝いした中で、先進的な事例として上勝町が挙げられていたことから、どのような経緯で取組が始まり、どうやって高いリサイクル率を実現したかに関心を持っていました。

上勝町では、2003年にゼロ・ウェイスト宣言を行い、2020年までに町内のごみをゼロにすることを目標に掲げていました。その目標の実現に向けて、ごみ分別の細分化の取組が行われ、リサイクル率80%以上を達成しています。

上勝町でゼロ・ウェイストに向けた取組が始まった背景として、以前の町は、家庭ごみなどの野焼きが昼夜関係なく行われ、近隣の居住地に被害が及ぶなど問題となっていました。1998年に徳島県から野焼きの中止通告があり、ごみ処理方法の見直しが行われました。その時、町内に建設した焼却炉は、ダイオキシンが問題となり僅か3年で閉鎖し、その後、町外の事業者にごみ処理を委託していましたが、ごみ処理コストが町政を圧迫していました。

そこで、ごみ処理量の削減に向けて、ごみ分別の徹底へと方向転換しました。分別開始当初の2001年は35分類から始まり、現在(2024年4月)では43分類と分別の細分化が進んでいます。しかし、ごみ分別では処理ができない保健衛生面が問題となるおむつやマスク、またリサイクル不可なゴム製品、複合素材などについては、処理費用を支払い徳島市で処理をしているとのこと。

ゼロ・ウェイストに関する取組の説明を聞いた後、



ごみ分別は種類ごとにコンテナに分かれている

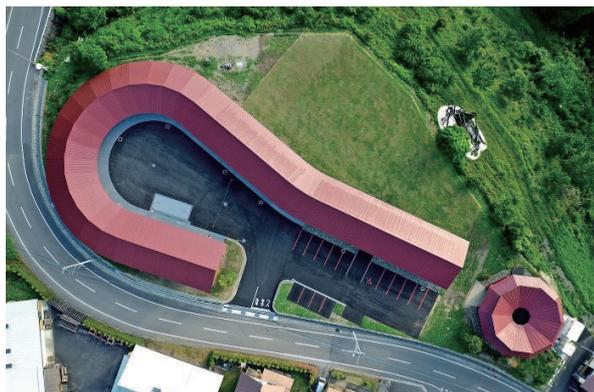


生ごみ処理機

町内のごみを収集しているゼロ・ウェイストセンターを訪問し、ごみ分別が行われる場所を見学しました。上勝町ではごみ収集車が走っていないため、町民の方はこの場所にごみを直接持ち込んでいるとのこと。ごみ分別は、種類ごとにコンテナで分けられており、コンテナの上部にはイラスト付きの説明があり、処理費用や搬出先などの情報が分かりやすく提示されていました。生ごみについては、生ごみ処理が収集場所にあり、その場で処理ができるようになっていました。

ゼロ・ウェイストセンターは2020年度に設置されました。建物は「?マーク」をした特徴的な形であり、その形となった経緯として「なぜごみをゼロにするのか」という行政からのメッセージが込められているそうです。

2021年に日本建築学会で紹介された後、企業研修や行政視察、修学旅行などの視察回数が増加しており、企業研修を通じた協業事業につながるケース



ゼロ・ウエストセンターの全貌※1

もあるとのことでした。

ゼロ・ウエストセンターの敷地内にはごみステーションの他、宿泊施設の「HOTEL WHY」、処分するのはもったいないまだ使えるものを持ち込むことができるくるくるショップ、ラーニングセンター・交流ホールといったスペースもあり、ごみ収集の場以外として活用されています。

#### ●ゼロ・ウエスト推進員のお話

ゼロ・ウエスト推進員は、上勝町の嘱託職員で、ゼロ・ウエストに関する取組を行う実働部隊であり、藤井さんは15年前に上勝町に移住後10年以上活動されています。

上勝町のゼロ・ウエスト宣言後、その理念に共感して移住者が増加し、町外から企業の参入などの動きもみられ、企業の取りまとや人材のコーディネートが現場の課題としてあるそうです。また、近年は、上勝町への視察数が大幅に増加したことで、取組紹介を行うオフィシャルガイドの人材確保が難しい状況になっているとのことでした。

移住者は増加したものの、コロナ禍によりオフラインでの関わりが減少し、昔から上勝町に住んでいる地元の方と移住者とのコミュニケーションをとる機会や場が少なくなり、地元と移住者との隔たりができたことから、両者の懸け橋となって活動することが増えているそうです。

本視察を通して、地域にある身近なものを資源として捉え活用し新たな取組を見出すためには、地域資源の掘り起こしとともに活用方法を模索する地域のキーマン、取組を継続するための体制構築を行う

ことの重要性を実感しました。一方、全国的な取組で脚光を浴びる中で、過疎化や高齢化など地域が抱える課題への対策に十分なマンパワーを割けないという面もあり、地域が抱える課題とのバランスをとることの難しさも感じました。これらの知見を活かし、新規の取組や事業を考えている地域のお手伝いをする際には、地域特性（資源・人材等）を把握するとともに地域の現状とのバランスを取った形で物事を進められるように意識したいと思います。

（ますど りょうへい）

（出典）

※1 徳島県観光情報サイト阿波ナビ HP

(<https://www.awanavi.jp/archives/spot/1309>)

## 海陽町で歴史と自然に触れる

酒見 知里

### ●海陽町の活動家「永原レキさん」

徳島県の伝統産業である藍染めから日本の歴史や、自然から得られる恩恵を学ぶため、当社のネットワーク会社であるアルパックの畑中さんからの紹介で、研修旅行の2日目に徳島県海陽町で多方面に活躍されている永原レキさんから話を伺った。

永原さんは、海陽町で生まれ育ち、全日本学生サーフィン選手権大会を4連覇するほどの腕前のフリーサーファー。大学卒業後は国内外でサーフィンと音楽と芸術を学び、その後地元でUターン後、藍染の商品制作・販売などを行う in Between Blues を設立した。その他、轟神社の総代や日本酒の販売など地域の活動も行われている。

### ●育成が難しい場所で身が分厚い牡蠣を作る方法

永原さんと共に轟神社の総代を担っている岩本健輔さんを永原さんから紹介していただき、牡蠣養殖事業の話聞くことができた。

岩本さんは世界一おもしろい水産業を目指す株式会社リブル(Re:Blue inc.)を設立し、牡蠣の種苗生産販売と養殖業を行っている。海陽町はサンゴが生息する温暖で美しい海であり、プランクトンなどの餌料が少なく、地元の漁師が牡蠣の養殖を諦めるほど牡蠣を育てることが難しい場所である。岩本さん

はまず、全国的に主流な「イカダ垂下方式」で牡蠣養殖を試みたが失敗した。その後、IoTの活用と日本では例の少ない「シングルシード方式」の養殖を行うことで、飲食店に求められる味もサイズも揃っている牡蠣づくりを成功させることができた。IoTセンサーを導入し、海の水温などデータを収集することで、効率的な生産ノウハウを確立させた。「シングルシード方式」で養殖した牡蠣は福岡では、「唐泊恵比須かき」が有名で現在福岡市内のホテルでも提供されている。「シングルシード方式」で作られた牡蠣は身が大きくサイズや形が揃いやすい。実際に岩本さんから見せていただいた牡蠣の殻は分厚く、身が肉厚であった。私はこれほど分厚い牡蠣を見たことがなく今後、ぜひ食べる機会を作りたいと思った。

### ●日本各地から信仰される轟神社

次に、永原さんが総代をされている轟神社を訪れた。到着後、轟の滝の近くまで岩場を歩いた。本滝は落差58mあり、近づく空気の水を含み涼しく、気持ちの良いものだった。毎年11月に行われている神社の例大祭では、永原さんを含めた神輿の担ぎ手は神輿とともに滝壺に入っている。

滝も含めた轟神社は、日本各地からの信仰者が訪れる場所である。林業、水産業、廻船業、農業など海部は水に恩恵を受ける産業が地域経済を支えており、海部の水の始まりである轟滝と水の神を祀る轟神社は彼らから熱い信仰を集めていた。

歴史的に徳島藩で作られた藍の流通を全国に展開する肝となる廻船業の木材は阿波海部のものが重宝されてきた。さらには産業だけでなく阿波踊りや阿波藍などの文化も日本各地へ伝播していった。例えば長崎のハイヤ節も阿波踊りから生まれたと云われている。永原さんは今後の徳島県内の観光について、藍やマリンアクティビティなどの既存の観光コンテンツだけでなく、歴史の物語や繋がりを知ってもらうことを観光資源になると捉えておられる。

神社の地域や自然を敬い大切に想う心や歴史の繋がりを大切にすることを広く世に未来に伝えたいという永原さんは、神社に縁のある有志と日本酒を作っている。轟の滝に鎮座する土地の水上様の名前をとって「水波女命」と名付けられた。辛口でお酒



日本酒の「水波女命」(MITSUGURUMAのHPより)

が得意でない私でも飲みやすかった。ぜひ、一度ご賞味いただきたい。

### ●in Between Bluesで藍染めを知る

永原さんが藍染を制作する作業場、商品の販売、カフェも併設している店「in Between Blues」を訪れた。商品棚には、日田の杉を使用し永原さんが藍染した鼻緒がついた下駄や、久留米緋の衣服など、様々な方や地域の素材とコラボした商品も多く、永原さんの広い繋がりを感じることができた。サーフボードやコップなど藍染の商品として普段見かけることがないものも、商品として並んでいた。

藍について詳しく解説をいただいた。ジーンズなどで使用されるインディゴ染めは化学染料を使用し染められたものに対し、天然物の藍を使用した藍染めは、藍の葉を乾燥しむしろをかけて3カ月の間水をかけ、発酵させた後に、釜などで2週間ほど加熱し発酵させた染料を使用しているため、手間と時間、熟練した技術が必要なものである。

永原さんは藍だけでなく、自然の恩恵を受けていることや歴史があったからこそ生み出されたものなど、地域を総合的に知ってもらいたいという強い想いを言われた。私は現在、地域の方とともに志賀島でマルシェを行っている。単発的なものにならないように地域に定着させることが大事であり、今回の視察は、マルシェのファン作りや「土地ならではの」を発信するためのヒントを得ることができた。現在のマルシェは野菜を販売する直売所のような形で販売をしているが、マルシェを行っている志賀島という土地を知ってもらうきっかけ作りも行うことで、周遊を促し、志賀島のファン作りがマルシェのリピーターを増

やすことに繋がるのではと視察を通して思った。

(さけみ ちさと)

## ノスタルジックな水族館

宮川 武大

四国研修旅行の2日目に、高知県室戸市の「むろと廃校水族館」を見学した。室戸市は、高知県東南部にある室戸半島に位置している。農業や林業、水産業が主な産業であり、マグロ漁や捕鯨によって栄えた漁師町ある。また、室戸沖が世界的に希少である湧昇域であり、1989年には日本で初めての海洋深層水の取水施設が作られた。しかし、人口は年々減少しており、国勢調査では、昭和55年に26,086人だったが、令和2年で11,742人となっており、北海道を除いた46都府県の中で、人口が最も少ない市となっている。人口減少に伴い、市内の小学校統廃合が続く中で、「むろと廃校水族館」は、廃校となった小学校を活用して水族館として運営している。当日は、学芸員の千原さんに水族館の概要や運営などの話を聞きながら、館内を案内していただいた。

### ●むろと廃校水族館の成り立ち

むろと廃校水族館は、2006年に廃校となった室戸市立椎名小学校を改修し、2018年に開館した水族館であり、管理運営をNPO法人である「日本ウミガメ協議会」が行っている。「日本ウミガメ協議会」は1990年に設立され、日本各地でウミガメに係る調査や保全などを目的に活動をしている団体である。同団体は、室戸市で2003年から職員が常駐し、定置網にかかるウミガメの調査や珍しい生物の標本作成などを行っていた。しかし、10年程の活動により、標本の数が増え、業務の幅も広がったことで、団体運営の負担が大きくなり、経済的にも厳しくなっていた。そういう状況の時に廃校活用の話があったため、作成した標本を置き、それらを展示する博物館の様な施設ができないかと考えた。計画を進めるうちにプールを活用して、調査・研究用のウミガメの飼育ができないかも検討し、水族館計画へと移行した。

### ●運営について

室戸市からの指定管理で運営を行っているが、指

定管理料はなく、収益源は入場料とグッズの売り上げのみである。極力費用をかけない運営を心掛けており、例えば、展示は学芸員の手作り、電気代のかかるヒーターの必要な魚を展示しない、水槽の水は海から引っ張ってくるなど、施設内の各所で費用をかけない様々な工夫が行われている。また、人的コスト削減のために、水槽についた結露等の水滴をふき取るためのタオルが設置されており、訪れた見学者自身が掃除できるようになっていた。

### ●個性的な展示物

廃校を活用した展示ということで、元々使われていた跳び箱や手洗い場を活用していたり、理科室では、人体模型と一緒に、魚の標本が多く展示されているなど、小学校の時代に使われていたものを上手く活用して展示を行っていた。また、展示されている魚は、地元の定置網にかかり、売り物にならない魚等を譲ってもらっているため、時期によって種類が異なる。そのため、普通的水族館では見られないような魚が展示されており、これらは、むろと廃校水族館の大きな特徴となっている。

グッズ・土産物の売り場では、若月館長が考案した様々な個性豊かなグッズが販売されており、これらが水族館の運営費となっている。また、グッズの中には、高知県の桂浜水族館とのコラボ商品もあり、既存の水族館との連携も行われている。

### ●むろと廃校水族館の効果

むろと廃校水族館は、昨年の9月に来場者が60万人を突破し、この水族館を目的に室戸市にくる人も少なくない。また、むろと廃校水族館には、全国



むろと廃校水族館外観



ウミガメが飼育されているプール

から学生が実習や研修に訪れるそうで、研修を終えた人の中には、室戸市で漁師となる選択をした方もいるらしく、地域に貢献していることも多いのではないかと思います。

高知市から車で2時間程かかる場所だが、唯一無二の施設であることから、多くの人が来場し、地域にも影響を与えている事例を知ることができ、廃校活用の事例や空間の使い方など、学んだ知識を今後の業務でも活かしていきたい。

(みやかわ たけひろ)

皆様から寄せられた「よかネット」へのご意見、近況などの紹介(敬称略)

■新しい開発組立工場も開設し、FAや自動化設備を製作しています。

(筑紫野市 田名部 徹朗)

■毎号力のこもった内容で、新しい知見があり楽しみにしています。ますますのご活躍を期待しています。No.154の「人口」の推移は大変興味深く拝読しました。(鳥栖市 村上 良知)

■「農家民泊きこり屋」を経営していますので、宿泊の皆さんにも読んでもらっています。今後とも、よろしくお祈りします。

(山口県阿武町 白松 博之)

■半導体で注目の九州ですが、戦後の石炭全盛でエネルギー基地・四大工業地帯のひとつであった北部九州の時代の再来を期待しています。あの時代を教訓として今後どのような社会基盤構

築が求められるかをリサーチいただくことを希望しております。(小城市 村岡 安廣)

■絵ではありますが「街づくり」という同業者なので、楽しく読ませて頂いています。年代や文化により、その手法や好みも変わってきますので、これが正解というものがなく、自問自答の日々です。プロポやコンペに勝つ内容と、実際住んでみて快適かという話では別物と考えています。これからの若者達の為に形で残すのではなく、考え方を教える事が重要だと思います。紙の情報はそれに気付かせてくれます。

(福岡市 深沢 栄太郎)

■編集・発行時にはご恵送賜わり誠に有難く心より感謝いたします。過ぎし時、当時(株)地域計画建築研究所の各氏との思い出なつかしい限りです。ご発展をお祈りします。

(豊岡市 金子 輝雄)

■年をとっていますが、毎朝7~8km歩いています。雨降っても傘さしています!

(那覇市 備瀬 知伸)

■今月末(5/25)、4年半ぶりに研究室0B・0Gとの飲み会を行います。慢性気管支炎を患っている僕への配慮もあり、コロナ感染流行時には休止していました。先日、5類移行の昨年5月から11月まででも死者1万64人と新聞に出ていましたが、まあいいかな、と判断しました。久しぶりに卒業生に会うのが楽しみです

(福岡市 江上 徹)

■国勢調査をもとにした人口推計調査結果のヒートマップ大変参考になりました。佐賀県は実績値が九州・沖縄内で2番目とは驚きました。福岡県に隣接している効果もあるのか、地価が比較的安く、生活費も相対的に都市部より抑えられるので、人口減少がゆるやかなのでしょうか。

(佐賀市 福田 勝法)

■九州一円の情報ありがとうございます。同時に全国的な問題でもある訳で、感謝しております。

(東京都新宿区 平澤 春樹)

■糸島市にいとこが住んでおりますので「よかネット」もより親しく感じ読ませていただいで

おります。いつも多岐にわたる地域の課題を詳しく掘り下げて調査・研究を行いまとめた情報としてきれいな冊子にして送っていただき誠に有難く思っております。(高槻市 日野 博彦)

■いつも興味深く拝見しております。

(福岡市 荒木 啓二郎)

■弊社社長就任3年目を迎えます。鉄道は新幹線や連立事業のような大型プロジェクトがなく、北海道等に仕事をもらいに行ってます。

(福岡市 津高 守)

■「緑満窓前」書斎の前庭と隣接する市の保有林の緑が輝いております。薪ストーブの煙突掃除も終わり、書斎も夏使用に衣替えです。唯悩まされるのは蚊です。蚊取り線香と虫よけスプレーは必需品です。(福岡市 西岡 弘)

■添田町の公共交通計画、地方都市共通の課題です。5年度に期待しています。40年ほど前には車いすの人達は公共交通から完全に切り離されていきました。今、高齢者がその轍を踏んでいるかのようです。当地もタクシーが激減し、通院に不自由しています。(別府市 小田 博道)

■いつもながら、質の高いレポートを読ませて戴き、敬意を表します。No.154の人口動態については、福男県外の市町村でも、個性的な動きを示しているところが有ち、興味深く感じられました。(春日市 藤原 正教)

■年金生活者です。要介護度3で週4回通所リハに通っています。また月に1度、1週間程度のショートステイに参加しています。通所リハもショートステイも両方とも気軽に参加しています。(北九州市 丸山野 美次)

■地域を多面的に捉える内容にいつも刺激を得ています。今後とも宜しくお願いいたします。

(鹿児島市 中武 貞文)

■『自然と人と暮らしの紡ぎ直し—斜面再生と空家活用物語』というタイトルで、ブックレットを作成するということをNPO長崎住まい・まちづくりトラストの今年の重点プロジェクトに決めました。個人的には、地域公共交通や世界遺産とまちづくりについて発信を強めているとこ

ろです。(長崎市 鮫島 和夫)

■早いもので定年(65才)まで2年あまり。後輩フォロー中心の仕事になっていますが、「よかネット」がよい刺激となっています。防災・気象関連、何かあればいつでもどうぞ。

(福岡市 竹尾 宗二)

■地域に密着した豊富な話題や活動状況が良く分かり、大変ありがたく拝読させて頂いています。

(芦屋市 藤山 正道)

■毎回送付頂きありがとうございます。楽しみにして読んでおります。今後共皆様のご活躍をお祈りしています。(飯塚市 小路 芳晴)

■“よかネット”を拝読して20年近く経過しました。興味深い九州各地での地域振興の取り組みを居ながらにして知り、編集部の皆様に感謝です。熊本では、地震、水災を乗り越え頑張っています。益々の編集を期待しています。

(熊本市 青木 勝士)

### 八女市上陽町に「ダニエル・イノウエ・ミュージアム」をオープン

山田 龍雄

八女市上陽町は、私が係わっている芋焼酎プロジェクトの芋(コガネセンガン)の植付け、草取り、蔓返し、収穫などのために年間4~5回、12年間通っているところである。

5月上旬、苗植付けの時に、芋焼酎プロジェクトのメンバーである上陽町の人から「ほたと石橋の館が閉館し、今、ダニエル・イノウエ・ミュージアムとなっているから、帰りに立ち寄ってみてはどうですか?」と言われた。折角の機会なので立ち寄ってみると、構造体はそのまま内部は全てリニューアルされていた。

「ダニエル・イノウエ・ミュージアム」は、4月25日にオープンしており、開館後間もない時期であった。多くの人がダニエル・イノウエ氏(米国初の日系人議員)と上陽町とは、どのような関係があるのか不思議に思うであろう。

実はダニエル・イノウエ氏の祖父井上浅吉、祖母

モヨの出身が上陽町上横山（旧：八女郡横山村）であったことに関係している。

横山村では井上家は有名な名家であったが、原因不明の火事によって自宅だけでなく隣家も燃え、弁償の費用を稼ぐために長男の兵太郎（当時 4 歳）を連れてハワイに出稼ぎにいったところからダニエル・イノウエ氏の物語がはじまるのである。

1960（昭和 35）年に、イノウエ氏は祖父の生まれ故郷である上陽町・上横山に里帰りし、墓参りをしている。これも小さいころから祖父から自分たちの故郷は横山村であること、先祖に誇りを持つこと、義務と名誉を大切にすることを教えられ育ったと言われている。

ミュージアムは、1 階にイノウエ氏の功績を紹介する展示室、地域食材とハワイアンフードとを融合したメニューを提供するレストラン、イノウエ氏や地域を紹介する VRシアター、地域の特産品を中心としたオリジナル商品を販売するショップ、2 階は貸しスタジオで構成されている。イノウエ氏がハワイ生まれ、ハワイ州選出の上院議員であったことから全体の雰囲気はハワイアンのテイストを醸し出している。

ミュージアムに隣接する公園には国内外からの寄付金をもとに胸像が建立され、2021（令和 3）年 3 月 18 日に除幕式が行われている。

イノウエ氏の生い立ち、功績は、この胸像の台座に記されている。（一部抜粋）

#### （イノウエ氏の功績）

- ・ 1924 年 9 月 7 日に兵太郎、日系人カメの長男として、ホノルルで出生。
- ・ 第 2 次世界大戦では日系人のみで編成された第 442 連隊戦闘団に配属され、激戦地ヨーロッパ前線で戦い右腕を失うが、その働きにより数々の勲章を受章し、米陸軍から英雄と讃えられた。
- ・ 帰還後は大学とロースクールで学び、1954 年にハワイ準州議員に当選。
- ・ 1959 年ハワイが 50 番目の州になると、民主党からハワイ州選出の連邦下院議員に当選し、米国初の日系人議員となった。
- ・ 1962 年連邦上院議員に当選。以来 50 年近く上院議員を務め、日本の精神を引き継ぎながら日系米国人として米国のために懸命に働き、数多くの功績を残した。また日系米国人の地位向上や日米の友好親善にも尽力。2010 年に上院で最



矢部川沿いの公園に建立されたイノウエ氏の胸像

も古参の議員として、大統領継承第 3 位の上院仮議長に選出された。

- ・ 2011 年に日本政府から「桐花大綬章」受賞。「幼いころから、祖父から義務と名誉を大切にするように教えられ、それに従って生きていた」と語った。
- ・ 2012 年 12 月 7 日 88 歳で永眠
- ・ 全米がその功績を讃えたダニエルを導いてきたのは、祖父の言葉、そして日系人としての誇りであった。私たちはダニエル・建・イノウエの魂の故郷が八女であることを誇りに思い、その功績を後世に伝えるとともに、日米両国の友情と世界平和を記念する。

イノウエ氏は、第 2 次世界大戦時の軍人として、また、政治家としても多くの功績があるが、日本人として後世に伝えるべきイノウエ氏の功績は 1988 年に成立した「市民的自由法」に尽力したことではないかと思う。

市民的自由法とは、日米の戦争中に強制立ち退き・収容された日本人移民及び日系アメリカ人に対して、各自に 2 万ドル（当時の円換算で 250 ～ 260 万円）を支払うというものであった。

この法律成立までの経緯を調べると、イノウエ氏の働きもあるが、①日系アメリカ人市民協会（Japanese America Citizens League）の権利獲得のための長年の運動、②イノウエ氏をはじめ 3 名の日系アメリカ人議員（スパーク・マツナガ、ノーマン・ミネタ、ロバート・マツイ）とともに JACL 本部に助言など指導的役割を果たしたことが大きかったと言われている。



イノウエ氏が授与した勲章、経歴年表、関係する書籍、手紙などが展示されている

1978年からJACLは謝罪と賠償を求める運動を立ち上げている。その後1980年のカーター大統領の署名により「市民の強制立ち退き・収容に関する委員会」が創設され、3年後の1983年に収容された6万人(当時の生存者)の人に2万ドルの賠償金を支払うことが連邦議会に勧告され、この市民的自由法につながるのである。ダニエル・イノウエ氏という偉人の心の故郷を訪ねたい人は、是非、八女市上陽町にあるダニエル・イノウエ・ミュージアムを見学してみてもどうでしょうか。(やまだ たつお)

#### ●参考文献

- ・ダニエル・イノウエの生涯「愛知工業大学研究報告 第48号」(山本茂美)
- ・ディスカバリー・ニッケイ「アメリカの戦後補償」(村川庸子)

### 近況

**【注】**『博多は歴史の古い町である。そこに繰りひろげられた歴史絵巻は、白砂青松の博多湾、万葉に歌われた島々を背景に、まことに多彩であった。古代より国際的に開かれた町であり、貿易と対外交渉の要所であった。』これは、「博多津要録第一巻」(財団法人西日本文化協会昭和50年3月発行)の刊行の辞の冒頭に書かれている。

この本は、今年度の博多旧市街にかかわる受託業務のため、博多の歴史本を探索していた時に見つけた本である。元の史料は、博多の総鎮守と称せら

れる櫛田神社の所蔵『筑陽博多津要録(巻之二～巻之二十八)』で、これを三巻に分けて発刊されている。元史料の『博多津要録』は、昭和30年福岡県文化財に指定され、近世の博多に関する最も基本的な史料集と言われている。残念ながら巻之一は紛失しているようである。

刊行された要録三巻には、『筑陽博多津要録(巻之二～巻之二十八)』の寛文六年(1666)から宝暦九年(1759)の期間の記録が掲載されている。要録の本文を読解することは難しいが、各巻には本文の解説が掲載されている。第一巻の解説には、『博多津要録』の成立や伝来については今なお不明な点が多い。巻之一が再び陽の目を見、また関連の史料が発掘されて、これらの点が解明出来る日を心から待ち望むものである。」と書かれており、津要録が始められた理由などは謎のままである。

近世初期の博多についての記録は見れないものの、それ以前の博多の歴史を、古代・中世の博多については、川添昭二氏(九州大学名誉教授、中世の九州史を専攻、多数の著書あり、1927～2018年)の執筆文が掲載されている。

キリシタンの世紀から寛文期に至る間の博多について、『博多津要録』の時代に至る背景が解説されている。古代からの博多の歴史は、対外貿易を抜きには語れないといわれる。日宋、日明、朝鮮貿易等、博多旧市街に残る古代からの歴史、文化資源を知り、博多の成り立ちを学ぶ機会を大事にしたい。

(山辺 眞一)

よかネット No. 155 2024.9

(編集・発行)

(株)よかネット

〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号  
福岡パールビル8階

TEL 092-283-2121 FAX 092-283-2128

<http://www.yokanet.com>

mail:info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所 TEL 075-221-5132

大阪事務所 TEL 06-6205-3600

東京事務所 TEL 03-5244-5132

名古屋事務所 TEL 052-462-1030